

共同研究プロジェクト

「グローバル、AI、IoT化時代に対応する 大学英語教育戦略」

〈中間報告〉

白石万紀子・河内智子

本研究では現段階で、CLIL(Content and Language Integrated Learning)、新規教育プログラム提案、の2分野において研究を進めている。それぞれの概要は以下の通りである。

1. CLIL (Content and Language Integrated Learning)

Content and Language Integrated Learning (CLIL) (内容言語統合型学習) は1994年にヨーロッパで提唱され、非母国語(英語)で教科科目を学ぶことを通して、科目内容と英語の運用能力のみならず、批判的思考力や他者と協力してタスクを達成させる行動力を身につけることを目指す教育方法である。この教育方法は母国語が英語以外であるヨーロッパ各国で急速に導入が進められており、言語教育方針として国家レベル、自治体レベルでの採用が増えている。本研究プロジェクトでは、2月のTESOL SPAIN学会、9月にポーランドで行われたEuropean Confederation of Language Centres in Higher Education(CercleS)学会においてヨーロッパ諸国のCLIL実施状況や課題を調査した。また日本では7月に初めて開催されたJ-CLIL学会第一回大会や、8月のJACET(大学英語教育学会)で日本の大学での実施状況と課題の情報を収集した。

CLILの導入はヨーロッパ諸国でも試行錯誤の途上であり、各国の実施状況には大きな差がみられる。比較的導入が早かったスペインでは、例えばマドリッドの半数以上の公立学校が完全なCLILでスペイン語以外の教科教育が行われており、大学での英語による授業科目の拡大が課題となっている。またその他ヨーロッパ諸国では産業界の要請から多くの大学がCLIL導入カリキュラムを現在模索中という段階である。日本の英語教育界ではCLILが大変注目を集めており、今後部分的なCLILの導入は大学において主流になっていくものと思われる。CLILの考えに基づいたカリキュラムは現在上智大学、早稲田大学、学習院大学国際社会科学部、創価大学、国際教養大学（大学、学部単位で導入）、東洋英和女学院（クラス単位で導入）等で行われているが、いずれも入学時の高い英語力を前提としている。またCLIL導入時の共通の課題として、準備する教員の負担が非常に大きいこと、教科科目の担当者との連携が必須であることが挙げられている。

2. 国際経営学部に向けた新規英語教育プログラムの提案

現在、このCLILに基づいた英語による新規教育プログラム案を作成している。グローバル化、AI化、IoT化が急速に進み、産業構造も激変する、将来を確実に見通せない時代において、国際的視点を持ち国際共通語である英語を使って自律的かつ協同的に問題発見・解決にあたり、持続可能な社会の発展に貢献できるグローバル市民の育成をプログラムの教育目標とする。

新規教育プログラムでは4 Semester以降に英語による専門科目(English Mediated Instruction, EMI)を設定している。これを可能にするために継続的、段階的な科目を設定する。具体的には英語レベルに応じて1 SemesterからEnglish for Academic Purposes (EAP), Soft CLIL (Global Economy, International Business, Global Issues, Cross-cultural Issuesなどを題材としたLanguage重視の内容言語統合学習)を導入し、3 Semester以降で専門科目と連携した、英語教員によるペア科目(セミナー、チュータリング)

を導入する。また同時並行的に交換留学やBSAP等の留学に参加することが求められる。

英語担当教員の授業準備にはこれまでの数倍の負荷が想定されるが、学生の成長のためには是非とも専門科目の教員と協力して努力していかねばならない。詳細については早い時期に発表できればと考えている。